



DeNA

amateur
draft meeting
designation order

3位

北海高校 / 投手

阪口 皓亮

今夏の58球で運命を変えた長身右腕・背番号10



若手投手陣で左腕王国を築きつつあるDeNAが無限の可能性を秘めた最速148キロ右腕を獲得。大阪から北の名門の扉を叩いた少年は最後の夏に煌めいた。(取材・文II長壁明)

単純かつ純粋な覚悟

京セラドームに近い大阪市大正区で育った細身で背の高い野球少年が飛び込んだ1901年創部北の名門・北海はその少年の成長とともに野球部史を塗り替えてきた。15年に44年ぶりの春季、夏連覇。16年夏には45年ぶりの2年連続夏の甲子園出場を決め、53年ぶりに甲子園4勝。夏は初の決勝進出だった。そして17年夏、戦後初の3年連続甲子園で全国最多出場記録を38回に更新。少年は背番号10ながら甲子園で先発し、「一部史

に残る」快投を見せた。

少年の名は阪口皓亮。もともと「最初に声をかけてくれた学校にいく」と決めていた阪口は歴史も伝統も、冬の寒さも、ハンパない雪の量も知らなかったし、気にならなかった。その純粋な覚悟が人生を大きく変えた。ちなみにDeNAに指名された今も「自分の野球」以外には冷静だ。指名後の会見で報道陣に誘導される形で「いつか清宮君と対戦したい」と話したが、阪口と対戦したい、と思われる投手になる。それが本心だろう。阪口はそんな少年に思える。

「仮想アドウワ」で注目

2年春に初めてベンチ入りした阪口の名が知られるのは2年夏練習要員としての甲子園だった。初戦で対戦する松山聖陵の長身工ース・アドウワ誠(広島)対策として連日汗だくになりながら打撃投手として「登板」した。初戦は大会6日目、10日以上投げ続けたことになる。試合までニュースを届け続けなくてはならない地元メディアには格好の取材対象だった。「実は2年の夏は調子がよかったです。関西特有の暑さや湿気がなじむのかもしれないね」

「たちが」と意気込んだことだろう。実際、甲子園から執狂の北海道に戻り、急ごしらえで出場した秋季大会では、甲子園決勝で登板した多間圭介を差し置いて初戦の東海大札幌戦に先発。敗れたものの、甲子園準優勝直後で注目される最初の公式戦で能力の片鱗を示した。メンバー入りした国体でも木更津総合戦で好投。阪口の名は広く知られるようになる。

それは同時に「ひとと冬越えたら、どんな球を投げるのか」という周囲の期待と、知らず知らずのうちに襲いかかる3年連続甲子園出場という重圧と戦う厳しい冬を示唆した。ここで阪口は女手ひとつで育て、北海道へ快く送り出してくれた母、負担にならぬように公立